

描かれた過去と遺産

―貝原益軒による古戦場図作製を事例に―

竹内 祥一郎（奈良文化財研究所）

1. はじめに

（1）近世における遺跡の顕彰と過去認識

遺跡を人類史上の物的な痕跡として顕彰、保護する前提には、それがどういった歴史を語る物件であるかを判断するだけの知識や認識が必要となる。日本史上、そうした歴史や場所に対する認識が一定程度集約され、民衆への浸透が進んだのは近世である。諸藩の大名が領内の遺跡の顕彰や保護に乗り出すには読書や侍講から得た歴史理解が必須であったし、旅人が名所旧跡を巡るときには携行した案内記がその土地の歴史や伝承を説いた。このような遺跡と認識の関係を構築せしめたのは、近世の安定した社会の中で育まれた学問や出版文化であった。特に、支配者と被支配者の身分的中間に位置した知識人は、歴史や遺跡に関わる知識の（再）生産を担った。

幕末維新期を含む19世紀には、尊王思想を背景とした陵墓研究だけでなく、地域や国家のアイデンティティ形成と絡んで、さまざまな書物や記念碑の作成が加速した¹⁾。このような営みはすでに17世紀から地誌編纂などの形で展開してきたことが指摘されている²⁾。17世紀後半から18世紀前半にかけての「元禄・享保期」は、こうした知的営みが花開いた、近世前半における画期である³⁾。それ以前から水戸光圀などの一部の大名は遺跡の調査と保護に取り組んでいたが、「元禄・享保期」には、儒学者のような人々が著述・出版活動を通じて、専門的な歴史知識を民間に広く普及させた点に画期性がある。

（2）元禄期における遺跡・過去認識と貝原益軒

「元禄・享保期」の知の広がりの中中で、八面六臂の活躍を見せたのが貝原益軒（1630-1714）である。福岡藩士であった彼は、藩務のかたわらで旺盛な著述・出版活動を展開した。平易な和文体で各分野の専門知を記した彼の「益軒本」は、地域住民にとっての知的読書への階梯となったことが指摘されている⁴⁾。また近世後期の知識人にもその著作は大きな影響を与えた⁵⁾。

彼が福岡藩士として主導した地誌編纂事業では、藩権力を背景とした現地調査や知識人ネットワークを基盤に、地域の歴史や地理に関する知識を獲得していた⁶⁾。しかし、彼の遺跡・遺産観や歴史意識のありようについては、必ずしも明らかではない。近世前期における知の広がりにも貢献した益軒自身の遺跡・歴史認識をさぐることは、近世に遺跡や歴史に対する知識や認識がいかに成立したのかを考えるひとつの手がかりとなるだろう。

本稿では貝原益軒の遺跡・歴史認識を探る手始めに、彼が作成した一枚の絵図に着目する。土地と不可分の関係にある遺跡を表象する際、近世の人々は文章だけでなく図像や絵図（地図）を多用した。各地の名所旧跡を文章と挿図で紹介する、名所図会シリーズが人気を博したことはよく知られている。絵図での表象も盛んであり、近世後期には絵図の上で過去の地形や出来事を表現・考証する営みが活発化した⁷⁾。本稿で取り上げる図もこうした地図に類するものである。

2. 古戦場図作製に至る経緯

(1) 貝原益軒と地図

貝原益軒は生涯に130部を超える著作を生み出し、そのうちのおよそ3分の1を京都の版元から世に送り出したベストセラー作家である。にもかかわらず、彼が作製した地図類は思いのほか少ない。そもそも彼自身が作成した著述目録には地図類は計上されていない⁸⁾。

ただ、管見の限り、彼が作製した地図は3点存在する。いずれも元禄7年(1698)10月1日の年記を持ち、うち2点は古戦場図である。1つは天正15年(1586)に黒田家と在地領主の宇都宮家が争った豊前国城井谷城を主題とし、もう1つは慶長5年(1600)の関ヶ原戦役絡んで黒田家と大友軍が衝突した豊後国石垣原古戦場を対象としている。益軒は、絵図作製の半年前にあたる元禄7年4月にこれらの古戦場を訪問している(後述)。もう1点の絵

図は大和国吉野山の名所を描くもので、古戦場図とは性質を異にする⁹⁾。

端書によると、いずれの絵図も福岡藩お抱え絵師の衣笠半助が清書した。この絵師は福岡藩が作製した元禄期の筑前国絵図を手掛けた人物である。この点から、特に古戦場図は藩主の命令に基づいて作製されたことがうかがえる。

近世の武家にとって、自家が功績を立てた古戦場を対象とした調査や、絵図作製、または現地での建碑といった営みは、自己のアイデンティティを確立したり再確認したりするための効果的な手段であった¹⁰⁾。こうした動きは在野の知識人たちを中心とした古代史研究とともに、近世を特徴づける歴史探究であったといえよう。

以下では、益軒が作製した2枚の古戦場図のうち、記載がより豊富な石垣原合戦を対象とした絵図を取り上げる。いずれの益軒作製地図も原本は失われたものの、その写しが国立公文書館や国立国会図書館、



図1 豊後国石垣原戦地之図(国立公文書館蔵)

福岡県立美術館、福岡市博物館など各所に所蔵されている。本稿では国立公文書館所蔵の「豊後国石垣原戦地之図」¹¹⁾を取り上げる(図1)。ただし、表題は後補とみられるため、以下では益軒作成の端書の中で記される石垣原図の名称を用いる。

(2) 家史編纂と古戦場

福岡藩の儒者であった貝原益軒は、寛文11年(1671)に福岡藩黒田家史の『黒田家譜』の編纂に着手した。この事業は幕府による『貞享書上』の収集や徳川幕府創業史である『武徳大成記』の編纂とも連動して進められた。『黒田家譜』は延宝年間に一応の完成をみたが、その後も再三改訂された¹²⁾。こうした事業のなかで、益軒は『黒田家譜』以外にも黒田家とその家臣団の歴史に関わる著作を多数作成した。益軒にとって、黒田家成立史の探究はライフワークの1つであったと言っても過言ではない。

編纂時から100年近く前に活躍した藩祖じよすい如水と初代藩主長政の事跡を記すにあたり、益軒は一次資料である黒田家伝来の古文書や、編纂物である軍記物などの古記録を参照するとともに、古老への聞き取り、古戦場などへの現地調査を実施したことが『黒田家譜』の「凡例」に記される¹³⁾。例えば貞享2年(1685)には藩主の参勤交代に供をする途上で関ヶ原古戦場に立ち寄り、領主の竹中家から案内者を得て見学したとみられる¹⁴⁾。

福岡藩黒田家にとって、石垣原合戦は関ヶ原合戦とともに徳川家(東軍)の勝利に貢献した合戦である。益軒は黒田家の徳川幕府への忠義を示す重要な武功として両合戦を位置づけた。『黒田家譜』全14巻のうち、10～13巻は両合戦の記述に充てられ、12巻はすべて石垣原合戦に関する記述からなる。それゆえ、益軒は関ヶ原古戦場同様に、石垣原古戦場を含む豊前・豊後国の見学を望んでいたようである。彼の日記によると、関ヶ原古戦場を見学した翌年に豊後への訪問を計画していたようだが、「故有て止む」¹⁵⁾とある(原文は漢文)。「故」の詳細は不明だが、参府の途上に位置した関ヶ原古戦場とは異なり、幕府や他藩の領地を藩務として訪れるには

さまざまな調整が必要であったと考えられる。

豊前・豊後国視察が実現したのはこの頓挫から8年後の元禄7年である。その際は「格式通りの供備へを以て、家族及門人を従へ、堂々と槍一筋の行列を組み、允許なき諸侯の城下街や領地には入らず、幕府の支配に係はる天下の公道を通過し、主として幕府の公料、俗に云ふ天領庄屋に迎へられ、その本宅若くば指定宿に泊ま」ったという¹⁶⁾。幕府から許可を得て、正式な手続き・体裁で現地調査に臨んでいたことがうかがえる。

益軒一行は、元禄7年(1694)4月1日に筑前国福岡を出立して豊前・豊後国を20日間めぐった。石垣原古戦場には4月13日に訪れている。帰郷後には福岡藩主に見聞の内容を報告するとともに、旅程を記した『豊国紀行』を9月下旬に、石垣原図を10月に作成(製)した。

3. 絵図に描かれた合戦の歴史

(1) 戦闘経緯の地図化

言うまでもなく、石垣原図の主題は石垣原合戦に関わる歴史や遺跡であり、絵図中央部分はそうした注記が占める(図2)。以下では、注記の内容を確認するとともに、記された歴史や遺跡の情報を益軒がいかに獲得し、どう利用していったのかを検討したい。

絵図上の石垣原合戦に関わる注記内容のほとんどは、『黒田家譜』に類似する文章を見出すことができる(表1)。その多くは個々の戦闘の経緯を示す内容である。『黒田家譜』¹⁷⁾の記載順にみると、黒田軍先鋒が大友軍に攻め寄せて壊滅した場面(番号1～6)、後続の黒田軍が大友軍に再度攻め寄せ、有力武将の吉弘よしひろむねゆき統幸を討ち取って決着がついた場面(番号7～11)に大きく分けられる。絵図上ではこれらの注記が混在して配置されており、石垣原合戦の複雑な戦闘の経緯が垣間見える。逆に言えば、絵図のみから戦闘の経緯を読み取るのは難しく、本図は『黒田家譜』などの家史編纂に関わる補助資料として作製された可能性が高い¹⁸⁾。

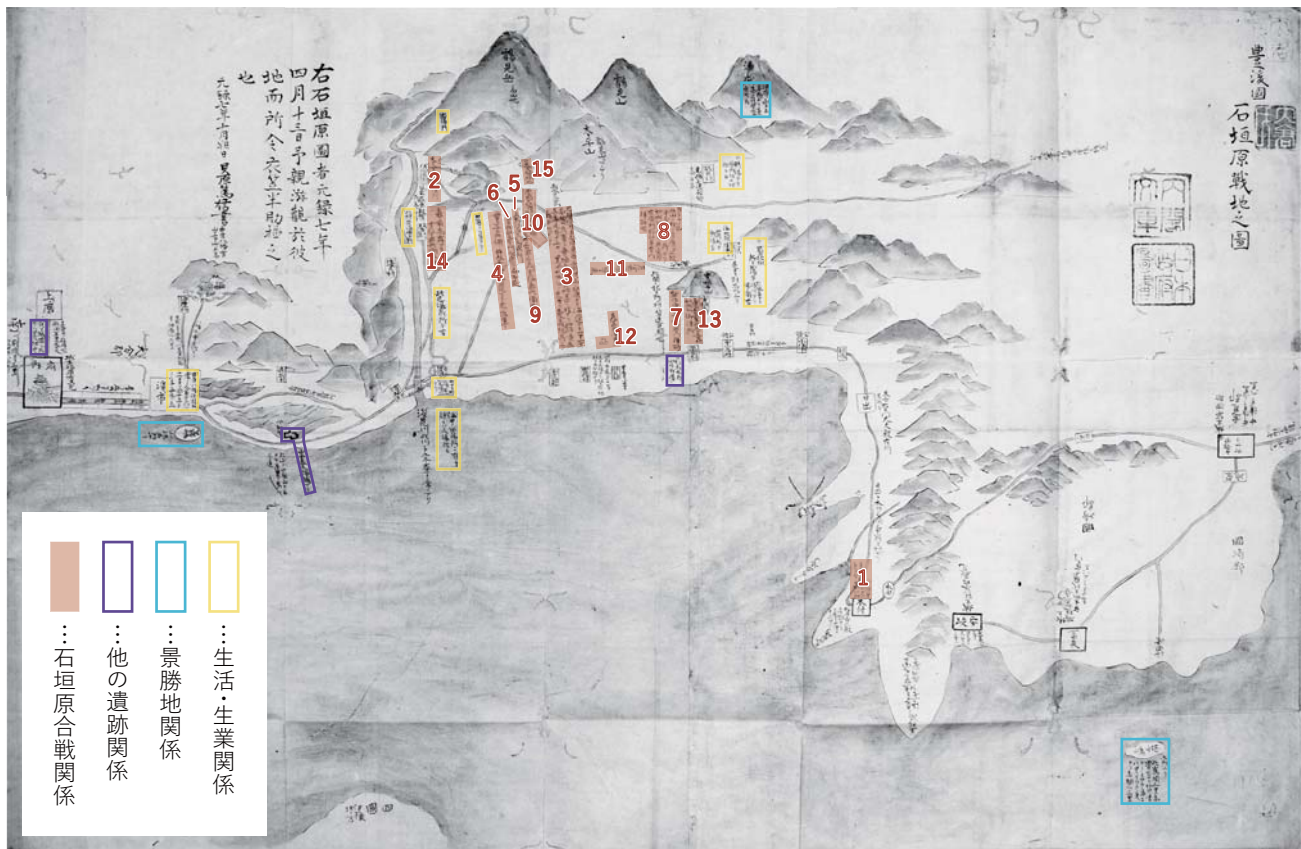


図2 石垣原図の注記内容の分類

個々の戦闘に関する情報は、前述した『黒田家譜』の調査方針に照らせば、黒田家や家臣団に伝わる古文書のほか、後世に編纂された軍記物などの文字資料が基本となっていたと考えられる。事実、『黒田家譜』の石垣原合戦に関わる部分では家臣の家に伝わる感状などの古文書を参考としたことが記されている。また軍記物については『黒田家譜』「凡例」に、『如水豊後戦記』、『大友興廃記』などの石垣原合戦に関わる参考文献が挙げられている。そのほか、益軒は家臣の家々に伝わる武勲を口承で聞き取っており、そうした情報も活用された可能性がある。

益軒は文字や口承で伝わる個々の戦闘に関わる物語のなかに登場する地名・地点を現地で確認し、石垣原一帯で入り乱れた戦闘の位置関係を絵図の上で整理したのかもしれない。『黒田家譜』「凡例」にあるように、益軒は史資料と聞き取りから歴史を紡ぐとともに、「境地の方所誤有らん事を恐れて」実地を見学し、『黒田家譜』の叙述のなかで歴史と地理

を再構成したといえる。

戦闘箇所の位置を確認する際、現地で益軒を案内したのは、旅宿とした庄屋たちであった可能性が高い。益軒の知人録には、石垣原付近の別府村や立石村などの庄屋たち5人の名がある¹⁹⁾。彼らは戦闘箇所の位置を教えるだけでなく、地域のさまざまな遺跡や伝承を益軒に伝えることとなる（後述）。

(2) 現地に残る古戦場の痕跡

石垣原図には、合戦の経緯そのものではなく、石垣原合戦に関わる遺跡や伝承を示す注記もある。例えば、吉弘統幸と黒田家重臣の井上重房が対峙した「忠内ヶ堀」（番号10）については、絵図に形状が見取り図で表され、規模も間数で記されている。この間数は『黒田家譜』にも転記されている。

同様に、地域住民が建てた吉弘統幸の墓（番号12、図3）については、絵図には墓の形状が表現されている。なお、『黒田家譜』と『豊国紀行』では、この墓に折れば瘧が治るとして近隣住民から信仰さ

表1 石垣原図と『黒田家譜』の石垣原合戦に関わる記載の対応

番号	石垣原図の注記	『黒田家譜』の記述	図的表現
1	細川越中守家臣松井佐渡守有吉 武蔵守	木付の城より、松井佐渡守有吉四郎右衛門等、二百人ばかり引具して	—
2	大友義統宿陣所	義統同心して、いそぎ立石に取上つて、是を陣所に定めらる。	—
3	此所慶長五年九月十三日 黒田 如水公ノ先手ト大友義統兵ト合 戦ノ地ナリ	(敵勢は) 立石を打立て、此方へ寄来り、石垣原にて対陣す。身方の先陣、時 枝平太夫、母里三兵衛かけ合せ戦ひしが、	—
4	母里与三兵衛 時枝平太夫此辺 マテ来敗軍	母里与三兵衛 時枝平太夫も、しばし支へて戦ひけるが、吉弘が猛兵に押立ら れ、力及ばず北をさして引退く。	—
5	久野次右エ門死所	敵大勢なれば叶はずして、次左衛門は終に討たれける。(中略) 次左衛門が死 したりし所は、鶴見原の内の内が堀より、四町ばかり南、立石の方なり。	—
6	曾我部五右エ門此辺ニ而□死	久野と一所にて励み戦ひけるが、終に討たれけり。	—
7	松井佐渡守有吉四郎右エ門陣所	細川家臣松井有吉は、石垣原の北、實相寺山の南なる、小山の上に陣取て居 たりしが、	—
8	カクドノ山 此山ノ北ノ方広サ二殿斗少シヒ キ、所アリ 如水公ノ先手井上九郎右衛門野 村市右エ門陣所也	身方の三陣は、井上九郎右衛門、野村市右衛門、後藤太郎助なり。此三人は 石垣原の北、實相寺山の西なる、加来殿山といへる山に、陣を取て居たり。	—
9	井上九郎右衛門吉弘嘉兵衛戦所	井上是をみて、能敵と思ひ十文字の鎧を以むかふ。	—
10	忠内ヶ堀 カラ堀横三間長百間	此所石垣原の南北の半より四丁ばかり南、立石の方によりて、野中に忠内が 堀とて、わざとほりたる如くなるから堀あり、東西に長き事百間余、横が三 間ばかり有て、南岸は高さ一間あまり有。下の方にほりの少まがりたる所あり。	○
11	吉弘嘉兵衛此辺ニテ死	家人の肩にかかりて、引退ける所に、井上身方に首取れと下知して、追かけ させければ、後藤太郎助家人、小野次右衛門といふ者、何の苦勞もなく突倒 して首を取。	—
12	吉弘嘉兵衛墓	其後其里人石垣原の東なる、小石垣村と南石垣村の間、大屋の西のかたはらに、 加兵衛の墓をつき、石碑をたて其姓名をしるせり。	○
13	慶長五年九月十三日晚如水公御 陣所	其日晚景に及びて、如水實相寺山に着て山上に陣を取たまふ。	—
14	吉弘嘉兵衛宿陣所	—	—
15	大友腰掛石	—	○

れていることを紹介している。こうした情報は、現
地を案内した庄屋たちから得たのであろう。

絵図上で図的表現を伴って描かれるモノは、益軒
が元禄7年当時の地表に残る石垣原合戦の痕跡とし
て可視的に捉えた遺跡と考えてよいだろう。そのほ
か、「大友腰掛石」(番号15)はその位置が点で示さ
れている。さらに、『黒田家譜』では石垣原合戦の
歴史を語るモノとして、以下に掲出するように地下
から出土する^{やじり}鍬に注目している²⁰⁾。

彼原(石垣原)のしばを土民ほり取て、屋の棟を
おほふ事あるに、其しばの内に、しばしばふるき鍬
のまじりてあるよしきこゆ。是まこと古戦場のしる
しなり。(括弧内は筆者注釈)

以上のように、益軒は史資料にみえる合戦の情報
だけでなく、現地で見聞した遺跡とその伝承を石垣
原図に書き留め、『黒田家譜』に盛り込んだ可能性



図3 現在の吉弘統幸墓
吉弘神社の境内にはさまざまな年代の石造物が立つ。

が高い²¹⁾。過去の合戦の経緯が綴られる『黒田家譜』において、遺跡や伝承の記述は、現在にも「生きる」物語として合戦を活写し、その歴史の深みを表現する効果をもたらしているのではないだろうか。

こうした所産である石垣原図は、福岡藩内のほか、豊後国内でも写本が確認できる。地域の歴史を多角的な手法で調査・表現した益軒の成果が、地元でも珍重されたのかもしれない。『黒田家譜』については、福岡藩内の武士や庄屋層を中心に写本として流通したことが指摘されている²²⁾。史資料と聞き取り、現地調査から得られた情報が絡み合って構成される石垣原合戦の歴史と遺跡の知識は、こうして後世に受容されていった。

4. 絵図に描かれた多様な文化遺産

石垣原図には、石垣原の戦いに関する注記のほかに、名所旧跡、温泉の利用など地域生活に関する注記がなされている。

古の詩歌で知られた名所^{などころ}については「名所ナリ」という記載がある。益軒作成の紀行文や案内記ではたびたび登場する表現である。石垣原図でこの記載がある由布山、姫島、笠縫島はいずれも『万葉集』に詠まれた歌枕である。石垣原図や『豊国紀行』のなかでは、名所の詳細に言及しないものの、益軒が『万葉集』の知識を備えていたことがうかがえる。

また、石垣原合戦に関わる遺跡と同様に、目視で

確認できた城跡や墳墓については、図的表現を伴って記している。例えば高崎山上の「大友端城」は簡単な縄張りとともに示し、上原館（国史跡大友氏館跡の一部）については方形の敷地の表現とあわせて「代々城有シ所／今ハ荒地ナリ」と記している。また、「別府太郎／同治郎墓」と記されるのは別府市に所在する国指定史跡鬼ノ岩屋・実相寺古墳群を構成する太郎塚古墳と次郎塚古墳と考えられる。このように、石垣原合戦とは直接関係のない遺跡に対しても広く関心を抱いていることがわかる。

生活・生業に関する部分で言えば、別府市近郊の温泉利用に関する注記が豊富である。石垣原合戦の古戦場を取り囲むように記される注記がそれに該当する。現在の「別府八湯」のうちの鉄輪温泉、明礬温泉、別府温泉、浜脇温泉に当たるものと考えられる。「出湯アリ」という簡単な記述のほかに、「海地獄」、「鬼地獄」（鉄輪温泉）、「明礬トル畠アリ」（明礬温泉）、「海中出湯所、有テ汐ニハ人湯治ス」（浜脇温泉）などの注記が見える。『豊国紀行』の記述はより詳細であり、明礬温泉における蒸し湯を記した最古の記録にもなっている²³⁾。現在、これらの温泉地は国の名勝や重要文化的景観に指定もしくは選定されている。

5. むすびにかえて

本稿で取り上げたような古戦場図は、過去の出来事や地形を表現した歴史考証地図に含まれる。一方で、石垣原図は歴史考証の成果だけでなく、現在に残る遺跡や景勝地、生活・生業など、実に多岐にわたる内容を備えている。こうした貝原益軒の営為を現在の価値観で紋切り型に評価するのは控えねばならないが、現行の文化財類型に当てはめるとすれば、史跡、名勝、文化的景観といった土地に根差す文化財への総合的なまなざしを見出すことができる。それゆえ、絵図に描かれた土地は合戦が行われた当時の様相ではなく、城下町や村落、街道の表現も含めて、あくまで益軒が旅した元禄7年当時の様相である。その上に配置される石垣原合戦の注記の方が土

地と乖離しているようにも見える。

こうした絵図の特徴は、貝原益軒個人の関心の広さに帰するところが多い。しかし、その一方で、彼の多角的で現在的なまなごしは、近世前期ないし元禄期における遺跡・過去認識の一つの特徴を示すものでもある。国学者や蘭学者、もしくは考証家など、学者たちがそれぞれの専門を名乗った近世後期とは異なり、元禄期は未だ専門分化の途上で、益軒のような儒者が多様な知的活動を担った。彼らは幕藩権力の求めに応じて多様な書物を編纂する過程で、歴史や地理に関する広範な知識を獲得した²⁴⁾。遺跡や景勝地、生活・生業など多岐にわたる地域の文化遺産を見出すまなごしは、彼らの幅広い教養を前提として培われたものではないだろうか。

さらに、こうした視座の獲得には、歴史資料だけを信用するのではなく、地域住民の「里言」や「民俗」に耳を傾ける調査手法も関係していよう。武将の墓への信仰や鍬の発見など、『黒田家譜』に記される住民からの情報は、遺跡や遺物を通し、現在からの視点で、地域に生きる物語として石垣原合戦の歴史を語る効果をもたらしている。

このように、「あのとき・ここ」の解明に終始するのではなく、「いま・ここ」からの視線で多様な遺産に関心を向ける益軒の態度は、地域の多様な文化遺産の関係性を紡いで全体的なストーリーを語るという、今日的要請にも通じる。現在の土地に息づく文化遺産を、専門領域の壁を乗り越えて、いかに評価し、保存活用していくか。遺産をめぐる近世知識人の知的実践は、文化遺産保護の前史であるとともに、将来の保護へのヒントを与えてくれるのかもしれない。

【註】

- 1) 羽賀祥二 1998『史蹟論——九世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会
- 2) 白井哲哉 2004『日本近世地誌編纂史研究』思文閣出版
- 3) 横田冬彦 2018『日本近世書物文化史の研究』岩波書店
- 4) 前掲3)
- 5) 上杉和央 2010『江戸知識人と地図』京都大学学術出版会
- 6) 竹内祥一郎 2020「貝原益軒による藩撰地誌の編纂と地理的知識の形成」『人文地理』72(1) pp1-20
- 7) 上杉和央 2002「近世における浪速古図の作製と受容」『史林』85(2) pp157-197
- 8) 九州史料刊行会編 1961『益軒資料7』九州史料刊行会 pp1-6
- 9) 古戦場図2点と吉野山の絵図では作製の経緯がやや異なる。端書によると、各古戦場へは絵図作製の半年前に訪問しているのに対して、吉野山へは過去に訪問し、さまざまな文献をもとに考証を重ねた結果を元禄7年10月に衣笠半助に清書させている。藩史編纂の一環でお抱え絵師により古戦場図が作製される際、益軒は私的な動機で作製した吉野山の絵図の清書をあわせて依頼したのかもしれない。またこの絵図をもととした「和州芳野山勝景図」は正徳3年(1714)に京都の版元から出版されている。
- 10) 前掲1)
- 11) 内閣文庫「古戦古城之図 15」(請求番号169-0274)
- 12) 森山みどり 1983「黒田家譜の成立について」(川添昭二編『新訂黒田家譜 第一巻』文献出版) pp541-630
- 13) 森山みどり 1983「黒田家譜の成立について」(川添昭二編『新訂黒田家譜 第一巻』文献出版) pp564-565
- 14) 九州史料刊行会編 1956『益軒資料3』九州史料刊行会 p127
- 15) 九州史料刊行会編 1955『益軒資料1』九州史料刊行会 p19
- 16) 森平太郎 1939『大分県紀行文集』p2
- 17) 『黒田家譜』の検討には以下の書籍を使用した。川添昭二編 1983『新訂 黒田家譜 第一巻』文献出版
- 18) 米家泰作は、小牧長久手の合戦の直後に原図が成立したと考えられる古地図が、合戦記に付随する資料として作製された可能性を指摘している(米家泰作 2020「調査報告 肥前島原松平文庫蔵「長久手合戦図」に描かれた戦場の地理」(京都大学文学部地理学教室『2019年度実習旅行報告書 島原市』p141)。
- 19) 九州史料刊行会編 1956『益軒資料3』九州史料刊行会 pp129-130
- 20) 川添昭二編 1983『新訂 黒田家譜 第一巻』文献出版 pp418-419
- 21) 石垣原図作製時には、すでに『黒田家譜』の第二版が成立していた。両者の影響関係をより正確に把握するには、『黒田家譜』第三版(宝永本)改訂に際

して、石垣原古戦場に関わる箇所にいかなる変化があったかを検討する必要がある。

- 22) 森山みどり 1983「黒田家譜の成立について」(川添昭二編『新訂黒田家譜 第一巻』文献出版) p598
- 23) 別府市 2012『文化的景観 別府の湯けむり景観保存計画』 p71
- 24) 前掲 6。

【図版出典】

図 1 国立公文書館蔵 (筆者撮影)

図 2 図 1 に加筆

図 3 2018年9月22日筆者撮影